

在外教育施設派遣教員帰国報告書

～上海での3年間の生活を通して～

前上海日本人学校浦東校 教諭

北海道帯広市立花園小学校 教諭 野田 剛

1. 中国の概要

- 中国は日本と同じ東アジアを組織する国の一つである。しかし、面積は963千km²で日本の約25倍、人口に関してはおよそ13億人で日本の約10倍と、規模としてはかなり大きな国である。国土の形を見てみると、おんどりに似ているといわれている。

中国は、「悠久の歴史をもつ国」と言われ、その年月は4000年と考えられている。そのため、万里の長城、紫禁城、故宮に代表される建築物をはじめとした世界遺産等が数多く存在している。

また、古から日本と密接な関係を持ち、文化・貿易・交流でお互いに影響を受け合い、そこからさらに進化をとげ、独自の東洋文化をさらに常熟させてきた。最近では、領土問題などでお互いの主張が合わないことがあるが、それぞれの考え方を尊重しながら妥協点を見出しているところである。



2. 中国の気候

- 国土が広大な中国大陸には、寒帯・温帯・亜熱帯・熱帯などの気候帯が存在する。年間降水量は太平洋側で1000mmを超える。西北部に行くにしたがって、雨量も減り乾燥した気候となる。

私が派遣となった上海は、温帯湿潤気候に属している。夏は海から暖かく湿った季節風が吹き込むので高温多湿の気候となり、逆に冬は冷たい偏西風が吹くため、同緯度の地域よりも寒く感じる。

四季を感じられるという点では北海道と共通するところはあるつつも、夏の暑さは予想をかなり超えるものだった。時として、中学生が体育の時間に熱中症で倒れることもあった。小学生ではさらにそのリスクが高まるゆえ、夏の外体育のときは児童の健康管理に神経質になっていた。今となっては、懐かしい思い出の一つである。

3. 中国・上海の文化

- 中国は長い歴史をもつ国であるがゆえ、様々な独自の文化が古代より受け継がれている。下の写真は、朝の外灘で太極拳を楽しんでいるグループである。多いところで **100** 人ぐらいの集団が、様々な公園で太極拳に親しんでいる。

皆さんは、太極拳を経験されたことがありますか？スローな動きなので一瞬お年寄り向けの健康体操という錯覚に陥りそうだが、実際に体験してみるととても筋肉を使うため、すぐに筋肉痛になってしまう。意外とハードな拳法である。



また、上海雑技団も有名な文化の一つである。想像を超える多くの技で、たくさんの人を魅了し続ける彼らは、毎日の厳しい練習と競争を乗り越えてきている。極限まで鍛えこまれた彼らの演技は、瞬きをするのを忘れてしまうほど凝視してしまう。太極拳も雑技も次世代にしっかりと受けついでいってほしい伝統文化である。

- また、彼らは大の花火好きである。**1月1日**の正月、**2月**の旧正月、国慶節などの慶事時期になると、花火を打ち上げ、お祝いムードをより高くする。日本で打ち上げ花火となると、周囲の状況に最大限配慮しながら上げることが多いが、彼らにそのような意識は全くない。ビルの間、道路の真ん中、公園の中など、自分が上げたい時間に上げたい場所で上げたい花火を思いっきり上げるのであ



る。一番激しく花火が上がるのは旧正月。この日は、**11時30分**くらいから少しずつ鳴り始め、**12時**を過ぎると一斉にドンドン始まる。多い時で**40**か所の打ち上げ場所を窓から確認したこともある。近いところは住まいから数mのところ。しかし慣れというのは怖いもので、**3年**もいると季節の風物詩のように感じて気にならなくなってしまう。不思議な感覚である。



また、中国・上海にはおもしろい乗り物がたくさんある。一昔前は自転車が国民の足だったようだが、生活レベルの向上にともない、バイクもクルマも普及し始めてきた。しかし、街で見かけるバイク（写真右）が、日本のバイクと少し違う。。。はてさて、よく見てみると足を乗せるところが自転車の形とそっくりなのである。この自転車とバイクが合体したような乗り物は、両者の



いいとこどりを合わせたモノである。税金は自転車なのでなし、黄浦江の渡し船の運賃も自転車料金、しかし実際はエンジンを積んでいるので、ペダルをこぐことなく前へ進む。この自転車バイクのメリットは「安い」「軽い」「安全」だそうである。ちなみに上のバイクは約 3000 元（約 48000 円）、下の通常のバイクは約 8000 元（約 128000 円）、もっばら上のバイクが人気である。



ウーロン茶の飲み方も微妙に違う。一昔前に中国から伝わってきて一時大ブームになったので、よく飲まれている方が多いのではないかと思います。さてそのウーロン茶、中国では砂糖を入れて飲む人もいます。コンビニでも、砂糖入りで売られているペットボトルもある。最初は戸惑うが、意外と何となく合う気もしてくる。もちろん無糖のタイプも売っており、ラベルの微妙な違いを見分けて購入する。日本人的にはウーロン茶はそのまま飲むものだと思い込んでいたので、砂糖入りと知らずに購入して飲み、違和感を感じる方もいるようだ。でもこのお茶に砂糖を入れる発想力はすごい。固定概念がすごく怖い側面をもっているのを教えてもらったのと同時に、今度はどんなモノに出会って、自分の固定概念が壊れていくのか楽しみになったのを覚えている。

4. 中華料理

- 中華料理ときいて、みなさんはどんな料理を思い浮かべるであろう？日本人にとって馴染みの深い中華料理は、「麻婆豆腐」や「餃子」、「炒飯」「拉麺」ではなからうか。

中華料理と言っても、その流派はたくさんある。大きく分けると、「北京料理」「上海料理」「四川料理」「広東料理」の 4 流派に分けられる。

北京料理は北京ダックに代表される料理である。そのほか、饅頭（まんとう）や餃子がある。餃子は日本のような焼いたものではなく、茹でた水餃子が主流である。その発音が中国語で縁起が良いものと同じなため、旧正月の春節に縁起物として食べることが多い。また羊のしゃぶしゃぶである「刷羊肉」という料理は、日本のしゃぶしゃぶの元と考えられている料理である。

上海料理は、濃い甘醤油で味付けしたものが多い。豚の角煮（紅焼肉）や焼きそば（炒麺）等が代表的な料理である。さらに、上海蟹や小籠包、焼き小籠包も日常的に食べられている料理である。日本でもよく聞く上海蟹はチュウゴク



モズクガニのことを指す。そのカニみそがとても美味で、豆腐やアスパラ等と一緒に食べる人が多い。しかし、チュウゴクモズクガニは危険外来種に指定され、生きている蟹の輸出入に制限がかけられている。自由に持ち運びができないのが残念である。



四川料理ときいて自分がすぐに思い浮かべるのは麻婆豆腐である。中国四川省の成都で、陳さんという方が最初に開発したと言われている。サンショウが多量に使われているのが日本と大きく違うところである。食べると数秒後に激しい辛さが舌を襲ってくる。筆舌に尽くしがたい辛さであるが、そのうち慣れてくる。慣れてくると、その辛さが恋しくなるから不思議である。その他、カエルを麻辣湯（すごくからいスープ）で煮たものや、唐辛子がごろごろ入った炒め物が出てくる。ほとんどが赤い色の料理でとても辛いのだが、その味の奥の深さは忘れられない。

広東料理は、日本人にとって馴染みやすい味付けである。海が近い広州・深圳・香港で発達した、塩味をベースにした、あっさり仕上げの味だからである。代表的な料理は酢豚・シューマイ・チャーシュー・野菜や海鮮のオイスターソース、または XO 醬炒めなどである。かなり日本の中華料理と似た味で、懐かしく感じるが多かった。

中国の食に対してよく聞く言葉は、「足のあるものは、机と椅子以外すべて食べる。羽のあるものは、飛行機以外なんでも食べる」というものである。その名の通り、ありとあらゆる食材がスーパーで売られている。写真最上部が豚の鼻、その下の写真が雀の串刺しである。どちらも実際に食べることはなかったが、現地の中国人に聞くと、とてもおいしいものだそう。



学校の現地スタッフに聞いた話で、一番衝撃的だった食べ物は、サルの脳味噌。生きたサルの体と頭を固定して、頭をノコギリで割り食べるのだという。その状況を思い浮かべると、さすがにトリハダがたった。さすが中国 4000 年の食文化。3 年住んでも到達できない未知の領域がまだまだありそうだ。

5. 日中関係

中国と日本は同じ東アジアの隣国というだけでなく、お互いに影響を受け合って発展してきた。しかし現在はどちらかという対立している印象が強い。

私が赴任していた**3年間(2011.4~2014.3)**は特に反日運動が活発に行われた。発端は尖閣諸島の領地権争い、そこから漁船の船長の身柄確保、某会社の社員確保と続いていく。やられたらやりかえす争いがどんどん肥大化していった。一旦は沈静化したものの、尖閣諸島の問題が再び勃発して、激しさを増していった。

右の写真が一番激しい反日運動のあった**2013年9月**の上海の様子である。釣魚島とは日本でいう尖閣諸島のことである。上のパネルには『还我钓鱼岛』と書いてある。意味は「釣魚島は私たちのものだ。」である。私は中国語はよくわからないが、「还」という字に昔も今もこれからも私たちの島という意図を感じる。下の写真には『为什么不打小日本』と書いてあり、意味は「なぜ小国日本を叩き潰さないのか」である。一触即発を感じさせる内容で、市民レベルにまで日本を敵対する意思があるように映る。



このあとは皆さんもご存じのとおり、一部の市民が暴徒化し日系のスーパーなどを襲撃し破壊する行為が中国各地で起こった。政府はそのあと公安軍によってデモ行為を鎮圧した(写真右)。

その間の日本人の安全については、深夜の外出を控えるよう配慮していたが、特にいつもと変わらない毎日だった。私たちを支えてくれる中国人スタッフにも変化はなく、住んでいた浦東新区の地域住民も変わらない。日本での報道を見て私たちが知るくらいに現地はそれほどいつもと同じだった。

日中関係を語るうえで外せない日が、**1931年9月18日**である。この日は「柳条湖事件」のあった日である。柳条湖事件とは、旧満州の南満州



鉄道の爆破事件のことである。この爆破は日本軍が行ったものの、日本はそれを中国軍の犯行として中国侵攻の足掛かりとしたと言われている。それからというもの、中国人は**9月18日**を「中国最大の屈辱の日」とした。中国に侵略行為を行った国は数あれど、中国人は日本という国を特に敵対するようになったというわけである。

6. 日本人学校浦東校

○概要

児童数約**750**名、生徒数約**750**名、合計約**1500**名。小学部は**26**学級、中学部**21**学級（平成**25**年度）。鉄筋コンクリート**4**階建てで、運動場はタータントラック。体育館、家庭科室、音楽室、図工室は2つずつ、理科教室に限っては第**4**まで設置。各教室エアコン完備。とにかく設備・道具・教具がすごい。



時間

割は、月曜日のみ**5**時間（**1**年生は**4**時間）、その他の日は全学年**6**時間。特色あるカリキュラムは中国語の授業があること。英会話は少人数指導を行っている。

各学年の教科のうち、理科、図工、音楽は専科教員が授業を展開する。その他を担当が受けもつ。各教員の週あた

りの授業時数は平均**23**時間前後である。

下校については、児童生徒全員保護者の送り迎えかバス送迎となっている。必ず全校一斉、もしくは学部一斉で

下校する。送迎バスは、決められたバスに児童が乗り終わると出発する。その時間約**10分～15分**。**5分**出発が遅れると、浦西に住む子ども達の自宅到着時刻が**1**時間遅れるので、各クラス時間厳守で児童を下校させる。



○特色ある学校行事

日本の公立小学校で行われている行事は、ほとんど行われている。

《運動会・学習発表会・身体測定・避難訓練・参観日・始業式・終業式等》
加えて在外教育施設の特色ある行事として、次のことも行われている。

《現地校交流・日中スピーチ大会（中等部）・現地校視察》

現地校交流は、毎年一回中国の学校を訪問したり来てもらったりして交流する機会である。中国の学校は9月に新年度を迎えるため、毎年11月前後で実施されていることが多い。中国の学生の考えを知ることができて、とても貴重な時間だった。

7. 危機管理

外国で過ごす子ども達の安心・安全をより保障するために、日本よりもさらに周囲の状況に合わせた危機管理が必要だった。具体的には、日中関係と大気汚染、自然災害である。

まずは、日中関係。反日デモが強く行われた**2013**年は、秋の大運動会が中止になった。また、反日デモが行われそうな日については、**2**日間臨時休校とした。これは日本人が一か所に集まることで何かの標的になるのを防ぐだけではなく、登下校時の児童生徒の危険を回避する意味合いも含まれていたように思う。さらに放課後の子ども達だけの外出時の制限、地元警察・学校警備員との連携を意識して、子ども達にとって学校も安全な場所になるように取り組んできた。

次に大気汚染。日本でも話題になった**PM2.5**の濃度に応じて、外体育や校外学習、理科の観察を制限した。下の二つの写真をみてほしい。これは、同じ場所から同じ方向を撮影した写真である。左が平成25年の

秋晴れの日。右が平成
25年**12**月**6**日、どちら
も朝**7**時の様子である。
この**12**月**6**日と



いう日は、私が上海に在勤していた**3**年間で最も**PM2.5**の濃度が高かった日である。この写真からも、**PM2.5**が人体に及ぼす悪影響は計り知れないと簡単に予想することができる。

この**PM2.5**から子ども達を守るため、学校として一つの基準を設けた。それは『**PM2.5**の濃度が**75**以下の時に体育をはじめとした外での活動をすべて実施できる。**135**以下の時に外での観察、休み時間の遊びのみを実施する。**135**～**350**までは学校外に出ず学校内で静かに過ごす。**350**以上で教室から出ないで静かに過ごす。』である。**2**時間ごとに教頭・教務（教務主任・学部教務）が連携しながら数値を確認し、子ども達への対応に変更があった場合には全校放送でそれを伝える。一年間毎日毎日**2**時間ごとに確認してきた。一日も早い回復をのぞむところである。

8. 終わりに

私が**3**年間中国に住んで中国人と交流する中で感じたのは、意外かもしれないが『日本人も中国人も同じ心をもっている』ということである。

まずは言葉の面でいくと、中国語には他の外国語では少ない「よろしくおねがいします」や「おつかれさまです」という言葉が存在する。これは日本人が日常よく口にする言葉である。それ以外でも人情を大事にするところ、とても手先が器用なところなど、我々日本人と同じ気質を持ち合わせているところが多いと個人的には考える。

しかしながら、もちろん異なる気質も存在する。でもそれを異文化として受け入れることこそ、両国民が仲よくなる第一歩であると個人的に思う。その先には、さらに成熟した日本・東アジア文化が待っていると確信する。「官交流の前に民間交流。」上海で働きトヨタ自動車の礎を築いた豊田佐吉さんの言葉であるが、自分もその通りだと思う。

最後にこの**3**年間、貴重な経験を積ませていただいたのも、地元北海道の諸先生方、各教育委員会の皆様、国際理解研究会の皆様の大きな大きなご指導・お力添えによるものであると思う。このような機会を与えていただいたことに心から感謝いたします。ありがとうございました。